

異様な光景の奥にある、 その人の事情とは…

【評者】石川貴美子 神奈川県秦野市健康福祉部市民健康課

時間の止まった家

「要介護」の現場から

関なおみ(著)



定価 756 円(本体 720 円+税 5%)
新書判, 240 ページ
光文社(Tel.03-3942-2241)

少し経験のある保健師なら、訪問先で出会った人に驚かされたり、感動をもらった経験があるはず。本書には、著者が医師として基幹型在宅介護支援センターに勤務し、訪問先で感じたありのままの驚きがつづられています。著者のカメラの腕前を発揮して撮影された、カラーよりもリアルな白黒写真は、訪問先の部屋のすごい様子を赤裸々に伝えてくれます。

著者は、訪問先で驚いた数々の光景を、本書のタイトルである「時間の止まった家」と表現しています。都心にもかかわらず「便器も床もないトイレ」「白いひげや髪の毛のなかで動き回っているたくさんのコロモジラミ」「押入れのなかに積もる猫の糞」…。たしかに、掃除や洗濯といった日常生活での快適さを求める行為とはまったく無縁の廃虚のような空間は、携帯電話やパソコンを駆使して時間に追われた毎日を過ごしている私たちからは、まるで時間が止まっているかのようにも感じます。けれど、そこに住む人にとっては、そこが自分の大切な居場所なのです。

私も出会っています。似たような人に…。嘔気を誘う異様な臭いと、見るからに不潔な光景。汚物でベタベタになっている床。しかも、なぜか自分だけがあちこち虫に刺されるという悲劇…。「早くこの場を立ち去りたい」と思っているのに、保健師という責任感から冷静を装い、おそろおそろその人の身体に触れ、何とかしなくてはと気ばかり焦っていたことを思い出します。

このような人を無意識のうちに「私たちとは別世界の困った人」ととらえ、緊急の連絡が入ったとき、心の片隅でうとうとし感じたこともありました。そんな私たちに対し、訪問を露骨に拒否する人もいます。でも、素直に頼ってくる人や自分の気持ちをぶつけてきた人もいました。この本を読みながら、いままで出会った人たちのことを思い出している自分に気がきました。

時間の止まった家での生活も、ピリオドを打つときがやってきます。本書でも「ボヤ騒動」や「認知症や病気の進行」を機に、新たな生活へと導かれていった方の生き様が綴られていました。著者は、訪問先で出会った人のありのままの生活、そして、それを支える人たちとのやり取りから、その人の心の寂しさを感じ、現在の人間性を培ってきた背景までも感じ取ろうとしています。また、著者以外にも本書には行政職員やケアマネジャーたちが登場します。彼らの根気強い見守りやタイミングの良いかかわり方は、私たち自身のめざす姿と重なり、大変参考になりました。

最近では、まるで別世界で起こっているかのように驚かされるニュースも、日常茶飯事のように流れてきます。保健師活動のなかでも、人と人との関係性の再構築が大きな課題となっていますが、自分の担当地域に住む人たちの体温を、私たちは本当に感じ取れているのでしょうか。「もっと現場に足を運び、相手の人生を少しでも感じ取れるような感性を取り戻さなければ…」と、感じさせられた 1 冊でした。